栃木県那珂川町におけるイワウチワ・カタクリの 開花景観を活かした地域活性化の実践過程

The practice process of local activation using the flower landscape of *Shortia uniflora* and
Erythronium japonicum in Nakagawa Town, Tochigi Prefecture.

大澤 啓志^{1*}

Satoshi OSAWA^{1*}

Abstract : I discussed how a flower landscape of native wildflowers is capable of functioning as a device for revitalizing the community as in the case with *Shortia uniflora* and *Erythronium japonicum*, which bloom in early spring. A starting point was to have been encountered with the flower landscape by a key person in the local community on both of the two activity sites. The impression at that time was motivating ; forest floor management for conservation of the target wildflowers had been resumed, and a walkway for visitors was being maintained. They had begun to collect a cooperation fee for parking or entrance fee because of the increase in visitors, and spent that on managing the habitat and maintenance of the walkway. However, they recognized that the rewarding aspect was more important than the financial aspect. They were conscious that their activity played a role in revitalizing the community, and they were enjoying that, including the hard management work. As a result, the secondary forests opened to the public were managed properly, the habitat of the target wildflowers was conserved, and the flower landscape was also being expanded. It was also key to easily understand the correspondence between conservation of the flower landscape and the forest floor management because both wildflower species were low herbaceous perennials, which tended to undergo thickening of the forest floor vegetation when management was abandoned. We need to learn about the intersection of agricultural and forestry activities and the growth of native species to create a spectacular flower landscape.

Keywords : Native Wildflower, Forest Floor Management, Flower Tourism, Cooperation Fee, Rewarding

キーワード：在来野草類、林床管理、フラワーツーリズム、協力金、遣り甲斐

1. はじめに

在来野草類（ワイルドフラワー）の開花景観を地域活力維持のための地域資源と捉え、管理放棄で荒廃が進みつつある里山林の管理・活用を図ることは、農村の生物多様性を活かした地域活性化活動の一つとして注目されるべきと考える。なぜなら、壮観な群落開花景観を形成する野草類は、観賞や（特に都市住民の）精神的開放を含む豊かな空間体験を可能とするため、周囲の良質な農山村ランドスケープと合わせて新たな空間的価値を創出する地域資源と捉えることが可能であるためである。本論では、この視点から針葉樹植林地内のイワウチワそして雑木林内のカタクリの開花景観を軸に管理・公開の活動を継続している栃木県那珂川町の事例を報告し、その意義や可能性を考察する。

在来野草類の開花景観を活かした地域活動の既往研究として、大澤・間野¹⁾は野焼き実践地でのノウルシ開花

景観を住民が地域資源として認識する過程を報告している。寺畑ら²⁾は全国のカタクリ公開地での観光資源としての利用実態を報告している。また、地域に多様に自生する野草類そのものを自治体のまちづくりにおけるビジョンの一つに掲げる事例³⁾も知られている。一方、造園学の視点より在来野草類の開花景観形成に向けた植生管理に関する研究は多い^{4)~10)}ものの、それらの開花景観を地域活性化に結びつける視点は必ずしも強くはない。

上記を踏まえつつ、在来野草類をシンボルとした住民による里山林の管理・活用は、実践地ごとの個別の契機・実践・活動深化・波及効果といった実践過程があり、その相互比較の中で共通する要素や文脈を考察することは、類似する活動を広める上で意義あるものと考えられる。そこで本研究では、特色ある早春季の群落開花景観を公開する管理活動実践地を2地区擁する栃木県那珂川町を事例に、その地域活性化の実践過程における要点を明らかにすることを目的とした。

¹⁾ 日本大学生物資源科学部

¹⁾ Coll. Bioresource Sciences, Nihon University

Corresponding Author* : osawa.satoshi@nihon-u.ac.jp

Fig. 1 活動実践地の位置
Location of the target sites.

Fig. 2 対象地のカタクリ及びイワウチワ群落開花景観
The flower landscape of *E. japonicum* community and *S. uniflora* community in the target sites.

2. 対象地の概要及び調査方法

那珂川町は栃木県東部に位置する中山間地域である。2005年に那須郡の旧馬頭町と旧小川町が合併して発足し、人口約15,500人（2021年現在）で、関東一の清流とされる那珂川が町中央を南流する。活動実践地として旧小川町に含まれる三輪地区カタクリ山公園のカタクリ群生地、旧馬頭町に含まれる富山地区船戸のイワウチワ群生地を対象とした（Fig. 1）。それぞれ、NPO法人山野草保存会（以下、カタクリ保存会）、富山船戸いわうちわ保存会（以下、イワウチワ保存会）、が活動主体である。現在、毎年その開花景観（Fig. 2）を観賞するために両地区には多数の来訪者が訪れており、旅行会社の観光バス・ツアーも立ち寄るほど有名になっている。

調査は、両活動団体の中心メンバーへのヒアリングとした。ヒアリング項目は、活動の契機、活動内容、管理作業、行政との関わり、遣り甲斐、展望及び課題等である。これは、カタクリ保存会に2020年9月の1回（事務局長及び理事2名の計3名）、イワウチワ保存会に2019年12月（会長1名）、2020年8月（会長・事務局長の2名）の2回、対面形式で複数名の場合は同時に各1時間程度実施した。なお、カタクリ保存会は活動初期の推進者（前会長）が故人となっていたため、雑誌等で当人の声が載せられている活動紹介記事も参照した。また、開花期及び非開花期における現地踏査（2020年実施）

も行い、斜面勾配の計測及び相観植生^{注1)}を把握した。

3. 結果

3.1 カタクリ保存会の実践過程

以下、ヒアリングによると、地主の一人K氏（故人）が1992年に自身らで所有する山林にカタクリ群落が存在することを、知人より聞き知ったのが契機とされる。当時、薪炭林利用が行われなくなり20年近くが経ち、林は荒れ放題であり、そのような群落が残っているとは思っていなかったとする。「ほとんど手入れもしていなかった雑木林を少し片づけて、内輪で花でも見ようと、軽い気持ちから始めたのがきっかけ¹⁾とする。その結果、翌年その場所で開花群落を見ることが出来、「これは凄いと感動した¹⁾とする。実業家でもあったK氏は、当山林でのカタクリ群落の保護を思い立ち、直ぐに私財を投じて保全活動を開始した。知人に呼びかけて「小川町山野草保存会」（カタクリ保存会の前身）を立ち上げ、立木の除伐や林床を優占していたアズマネザサの下刈りを再開し、現在も継続している。その結果、カタクリ群落は着実に規模を増し、当地の早春の一面の群落開花景観が次第に口コミで知られるようになり、1996年頃よりそれを観に訪れる人が増加したとする。

この状況を受けて、地域振興の一環で旧小川町が県の補助も受けつつ当山林を「カタクリ山公園」として整備するに至った（13.4ha：2001年開園）。カタクリ生育地を含む山林（保安林指定）は借地のままであるが、隣接する平地に駐車場を町が整備し、散策路として駐車場から主要なカタクリ群生地までの木道及び休憩用の四阿を県が整備した。開園と同時に、町からの提案でカタクリ開花期間は協力金（駐車料金として一台につき乗用車500円、大型車1,500円）を取り、活動費に充てていた。多いときには約5,000台／年の来訪者が得られた年もあったとする。ただし、2011年の東日本大震災時、2020年の新興感染症流行時には来訪者数は著しく低減したとする。カタクリ開花期間には仮設の売店を出し、地元野菜や飲食物、山野草の販売も行っていた。

カタクリ保存会は当初任意団体であったが、2001年の開園と同時に町からの管理委託の受け皿としてNPO法人化している。会員は多いときは35名程度であったが、現在15名程度とする。いずれも初代会長K氏の声掛けによる知人で、他の地主、旧小川町在住者に加えて周辺市町在住者も含まれる。K氏の逝去後もその意思を継いで、当初のメンバーを中心に活動を継続していた。

カタクリ生育地の具体的な管理内容は、①下刈り（10月中旬～1月上旬）、②落枝・枯れ枝の搬出（1月中旬

以降), ③落ち葉掻き (2 月), ④間伐 (数年に一度), ⑤散策路の保守管理及び拡張 (通年), ⑥公開期間中の駐車場の交通整理 (2 週間ほど毎日) 等であった。3 月に入ると花芽が出始めるので, これらの作業は 2 月末頃までに終了するとする。下刈りは, 各自が自前で草刈り機を持ち寄り, 毎年 13 町歩程の公園全域に対し行い, 各回平均 10 名弱での作業になるとする。町からの管理委託費及び開花期の協力金は, 作業日や公開期間中の駐車場内の交通整理の日当に充てるが, 散策道整備の材料費や下刈り機の燃料代等もあり, ボランティア (無償) で活動する場合も多いとする。

カタクリのみならず, 自生していたザゼンソウ, キクザキイチゲ, ニリンソウ, ショウジョウバカマ, ヤマユリ等の生育地管理・増殖, 非自生のミズバショウ, キスゲ等の移植による群落開花景観の創出も公園内で展開していた。また, 県の整備した主動線となる木道から派生する形で, 林内に幾つもの簡易な散策路を独自に整備し, 多様な場所で群落開花景観を観られるように工夫していた。活動の遣り甲斐については, 「来てくれた人に満足してもらって帰ってもらうこと」, 「なんだかんだと楽しくないとできない」とする。そのため, 全域の下刈りに何日もかかる等の管理作業についても, 「大変だと思ったことは一度もない」とする (いずれも, ヒアリング対象者全員の共通意見)。課題については, 活動メンバーの固定化およびそれに伴う高齢化とされた。ただし, これまでは管理活動は滞りなく行われており, 新たな会員の積極的な募集活動は現時点では行っていないとされた。

3.2 イワウチワ保存会の実践過程

ヒアリングによると, 富山地区ではそれまで凸凹の隘路で交通不便であった幹線道を町が合併を機に整備したことに対し, 感謝の意味も込めて町の人口減少に伴う活力低下に対し何か地域で出来ることはないかと, 地域資源を発掘する活動がまずあったとする。そこで地区内の各行政区の役員が中心となり「とみやま郷づくり会」を立ち上げ, 地区内を貫く河川においてゲンジボタルの生息を再発見する中で生息環境整備として河川敷の草刈りを行い, 合わせて「富山ほたる祭り」といった外部からも人の集まるイベントによる地域活性化を実践していた (2005 年～継続中)。他にも地域資源を探していた中, 当地区在住の M 氏 (現イワウチワ保存会会長) が所有する山林に大規模なイワウチワ群落が成立しているのを発見 (2005 年) した。同町では, 先述のカタクリ山公園でカタクリの開花景観による観光客誘致活動を既に行っていたため, そのメンバーを呼んで見てもらったところ, 「すごい資源」とであると評価された。そこで散策路を自

前で整備し, 翌年より開花景観の写真をチラシにしたところ評判となり, 数年で 1,000 人を超える来訪者が得られたとする。

その後, 口コミやインターネット・SNS 等でその開花景観の壮観さが広まり来訪者数が増加する中, 2012 年にイワウチワ保存会を立ち上げる (地区住民 10 数名で構成)。これは本格的な林床環境の管理や整備を行う上で, 町や県の補助を受ける母体が必要となったためとする。イワウチワ保存会は公開用の環境整備も順次行い, 林道の起点に大型車用, 終点には小型車用の駐車スペースを設け, 案内板も設置している。また, これらの来訪者の増加に伴い, 当初 (2006~2012 年) の無料での公開に対し, 2013 年からは整備・管理費として協力金 (入山料として当初 200 円, 2019 年からは 300 円/人) を得るようにしたとする。初めは自然に咲いている花に協力金を得ることに躊躇したが, 県職員より「価値のあるものは対価を払ってもらわなくてはいけない, 無料のままでは地域の成長が止まってしまうし, 遣り甲斐も無くなる」との指摘を受けて踏み切ったとする。なお, 協力金を得るようにしても来訪者数は衰えず, 多い年には約 4,000 人が来訪したとする。

具体的な管理内容としては, ①間伐による光環境の改善 (数年に 1 度), ②散策路の整備, ③イワウチワの競争植物となる灌木やシダ類の刈り取り (秋季) や抜き取り (通年), ④落ち葉・落ち枝の除去 (通年), ⑤公開期間中の自家用車による来訪者への林道内での交通整理・保守点検 (2 週間ほど毎日) 等であった。特に②の散策路は, 急傾斜地であるため間伐材を用いた斜面山側の土留めと谷側への転落防止の手すりを設置する形で徐々に拡張してきたとし, 現在は延長 1.2km 程になっている (Fig. 3)。また, イワウチワのみならず当地に自生する春植物ショウジョウバカマも近接地で増やす試みがなされていた。

一方, 2014 年からはイワウチワ群落に向かう林道入口の駐車場付近に, 来訪者に帰り道に楽しんでもらうため, 休耕農地 (約 1ha) に春咲きの花木 (ハナズオウ, レンギョウ, 花桃等) を植えた園地も整備し始めていた。

Fig. 3 公開地に整備された遊歩道
The walkway in the opened place.

また、2014 年からは 1.5km 程の林道沿いにシュウカイドウ群落を播種・育成し、夏期にも沢沿いの林道を森林浴しながら散策が楽しめる環境整備を行っていた。

入山料についてはイワウチワ保存会の収益はなく、基本的には上記の花木園地の整備・管理（年 3 回の草刈り）や公開期間中の交通整理のための「地元の若い人の日当」に充てているとする。特に「儲けの要素が入ったら面白くない」と、あくまでも地域活性化の一つの手段であることを自覚していた。活動の遣り甲斐について聞いたところ、「普段の野良仕事だけではつまらない。こういう活動があるとやっぱり楽しい。」とする。また、当地区の富山はたる祭り等も含め、「外部から人が来て「すてきな所ですね」と言われると、地元の住民が笑顔になる。」とする（いずれも、ヒアリング対象者全員の共通意見）。課題については、日常の草刈りの日当等に充てる活動資金の確保が挙げられた。これについては入山料を上げる選択肢もあるが、わざわざ観に来てくれる来訪者にあまり負担を掛けたくない意向より、当面入山料の値上げは考えていないとする。なお、資材購入や宣伝面では、一部で町及び町観光協会の協力・支援を得ていた。

3.3 両活動実践地の生育立地及び活動の展開

両活動実践地の群落形成地の生育立地を、Table 1 にまとめた。那珂川を挟んでそれぞれ喜連川丘陵と鷺子山塊に位置し¹²⁾、このためカタクリ生育地は丘陵に入り込んだ谷のやや緩やかな斜面（10～25°）、イワウチワ生育地は 45～50°の急傾斜の山地斜面であった。前者は落葉広葉樹からなる雑木林、後者はヒノキ人工林内に位置し、いずれも樹林管理により低木層の被覆率は低く（0～5%）になっていた。

また、両活動実践地の活動を比較すると（Table 1）、開始及び協力金を得ることも三輪地区（カタクリ開花景観）が十数年前先行していた。先行する活動実践地が存在し、そこからの価値評価があったことで、富岡地区はイワウチワ開花景観が地域資源となることを認識するといった、類似活動の連鎖が認められた。主な活動内容は、いずれも樹林管理・散策路の整備・保守等であった。ただし、三輪地区では地域で伝統的に行われてきた雑木林管理手法を踏襲するものであったのに対し、富山地区ではイワウチワの保全・育成に特化したものとなっていた。一方、カタクリ・イワウチワの開花景観を観に来訪者が増す過程で、他の植物を用いた副次的な開花景観も近傍地に育成・整備する展開が共通していたが、これには自生種のみならず、非自生種や園芸花卉類の植栽も含まれていた。この動機については、ヒアリングによれば両保存会とも「観に来てくれた来訪者に満足して帰ってもら

いたい」といった内容の回答であった。

4. 考察

4.1 地域活性化活動の展開過程

両実践地に共通する活動の展開過程を Fig. 4 に示した。いずれもまず群落の発見に始まるが、その時点ではその地域資源としての価値を直ぐに認識した訳ではない。カタクリ保存会では仲間内での余興程度の認識であったが、いざ開花景観を実見することで仲間内だけではなく地域で守り受け継ぐべき存在であるとの認識に至っていた。イワウチワ保存会では、ある時に開花景観を発見したもののその価値を自身らでは測りかね、同じ町内で先行活

Table 1 両活動実践地の生育立地及び活動状況
The habitat of the target sites and the activities.

地区名	三輪	富山
開花景観種	カタクリ	イワウチワ
生活型	早春季植物の多年草	常緑多年草
花茎の高さ	20～30cm	5～15cm
開花期	3月下旬～4月中旬	3月下旬～4月上旬
群落規模	約 3ha	約 1ha
地形区分	喜連川丘陵	鷺子山塊（八溝山地）
標高	150～190m	170～240m
斜面傾斜	10～25°	45～50°
樹林高	14m	16m
樹林優占種	コナラ・クスギ	ヒノキ
低木層被覆率	5%	0%
保全活動の開始年	1992 年	2005 年
協力金の開始年	2001 年	2013 年
主な活動内容	樹林管理、 散策路の整備・保守	樹林管理、 散策路の整備・保守
副次的な開花景観の育成・整備	早春季の野草類、 春季のミズバショウ*、 夏季のヤマユリ・キスゲ*	早春季のショウジョウバカマ、 春季の花木類*、 夏季のシュウカイドウ*

*：非自生種もしくは園芸花卉類の植栽

Fig. 4 在来野草類の開花景観を活かした地域活性化の展開過程の模式図

Diagram of the practice process of local activation using the flower landscape of native wildflowers.

動するカタクリ保存会メンバーに評価してもらうことで、他には無いものであることを理解するに至っていた。いずれも当初は、野草類の愛好家ではない地域住民による地域資源としての価値認識であった点が特筆され、邂逅期と位置付けられる。この愛好家でもないごく普通の住民にも、ある種の感動を引き起こす開花景観であったことが、以降の外部来訪者をも引き付ける要因であったと考えられる。

続いて対象種の保全・育成のための樹林管理と来訪者に観てもらうための散策路の整備を始めるが、そのための活動主体として仲間内を中心とする団体を立ち上げている。最初の発見及び価値認識の邂逅者が、一声で幾人もの賛同者が集まる地元の名士であったことが主要因であるが、開花景観が地域活性化に向けた地域資源になることを見抜くほど、常に地域の振興を意識しているキーパーソンの重要性をここでは指摘しておく。その際、生態学・造園学・観光学等の専門家とは特に連携せずに、これまでの農村での自身の山仕事の経験を基に試行錯誤しつつ作業内容を決めていた。開花景観を育むための荒れていた樹林地をきれいにするための仲間たちとの共同作業であり、無償の労働であっても「こんな林にしたい」と語らい実践する楽しみを実感したと推察される。来訪者からの協力金を得る前の、いわば「仲間内での遊び」的な色合いの強い試行期と位置付けられる。一方、口コミ・インターネット等を通じてその開花景観を観に訪れる来訪者は増加し、安全に心地良く（不満を抱かせずに）観賞してもらうための気遣いと環境整備が求められるようになり、先の試行期を経て次の自覚的実践期に移行することとなる。

農村域での観光地への移動は自動車が一般的であり、来訪者の増加に対して駐車スペースの確保が懸案となる。カタクリ保存会では、実践地が丘陵地の端で平地との境に位置しており、行政の働きかけもあり公園化することで近接農地を駐車場として整備することで対応していた。イワウチワ保存会の実践地は平坦地の少ない山間地であり、公開地付近の林道を一部拡張して10台分程度の駐車スペースを確保するとともに、それ以上のスペースが取れなかったため1.5km手前の林道入り口部分の空き地に広い駐車スペースを整備していた。観光バス等の大型車の場合はこの林道入り口に停め、林道を小一時間ほど遊歩してイワウチワの群落開花の公開地を見学するコースを用意したことになる。また、いずれも公開地内の散策路も恒久的なものとし、林内での延長密度も順次増していた。

これらの来訪者向けの環境整備を進めるとともに開花期間中はイベント化して積極的な来訪者の誘致を行い、

合わせて協力金を徴収する仕組みも導入していた。言ってしまうと「そこに生えているだけ」の野草類に対して協力金を得ることに葛藤はあったとするが、行政関係者の意向や助言により、活動を継続するためには必要との判断で徴収に踏み切っていた。この協力金を含めて樹林管理や散策路の保守を行いつつ、対象植物以外にも観賞できる在来野草類や花木類の育成を行っていたことも、両実践地で共通しており興味深い。これは来訪者にカタクリ・イワウチワの開花景観に加えて滞留中に楽しんでもらうための心配りからの活動であり、コアとなる開花景観の周囲に副次的な要素を育成・整備することで地域資源としての魅力の強化を図っていた。

このように、いずれも邂逅期、試行期、自覚的実践期を経て活動を継続し、荒廃していた公開地の樹林が適正に管理される構図が示された。むしろこのような過程を辿ったことで、現在、自身らの活動が（三輪／富山地区及び那珂川町の重層性を有しつつ）地域活性化の一翼を担っていると自覚し、時には酷な労働を伴う管理作業も含めて活動自体を愉しんでいると、遣り甲斐に対する回答より判断された。

4.2 自生野草類の開花景観を活かした地域活性化

園地あるいは休耕地等への園芸花卉の群植景観（ネモフィラ、コスモス、ヒマワリ等）に代表される既存の多くのフラワーツーリズム^{注2)}に対し、本事例はその地域に自生する在来植物を地域資源として見出していることが特筆された。それは放棄されがちな里山の樹林管理と連動しており、両実践地においては群落育成のために適正な管理が継続されていた。対象植物は管理放棄による林床植生の藪化の影響を受けやすい低茎の多年草であり、開花景観の保全と自身らの樹林管理との対応が解りやすいことも一つの鍵であったと言える。春植物のカタクリ、常緑性であるが早春季に開花するイワウチワと、2週間程の短い間に他の植物に先駆けて咲く花卉が目立つ植物で、群落形成によって斜面の起伏に応じて地表を面的に開花景観で覆うのが共通していた。これは、レクリエーション林における在来野草類による草花型林床⁹⁾に相当し、魅力的な樹林空間を創出するものとなっていた。

藤本¹³⁾は審美的魅力を有する林内景観の特徴として、高木・草本の明瞭な2段の階層構造、高さの揃った林床植生、奥まで見通せる奥行感を指摘している。同様に、梶返¹⁴⁾は視覚的に好まれる人工林の特徴として、垂直に伸びる樹幹の整然とした集団美に加え、林床植生の高さが揃って林内の見通しが効くことで明るく、安心感が得られることを指摘している。両実践地とも、①低木層を欠き明瞭な2段の階層構造となる（Table 1）とともに、

②林内の見通しが効き (Fig. 3), ③林床に丈 10 数 cm 程度の対象種が一面に揃って優占・開花し (Fig. 2), 上記の指摘に沿うものとなっていた。

また、下村¹⁵⁾は森林景観評価においては視覚的な美しさのみならず、豊かな生活(人々の営み)を感じさせる美しさという観点の重要性も指摘している。これを当てはめると、斜面一面に広がる開花景観という現前に展開する視覚的優美性のみならず、手入れの行き届くところで農林業に伴う営みを感じる里山林(雑木林・ヒノキ林)を舞台としていることも、来訪者にとっての魅力になっていると考えられる。すなわち、①地域で継承されてきた農林業に伴う営み(里山林としての土地利用・樹林管理)と、②自生していた在来種(特に管理放棄に対する脆弱性が想定される林床の低茎草本類)が交差することで生じた壮観な開花景観の魅力というものであり、それは園芸花卉を用いたフラワーツーリズムでは持ち得ない物語性を内包するものである。在来野草類を用いたフラワーツーリズムにおいては、それぞれの土地における「農山村の人と自然の営みの交わりの豊かさ」といった物語性の明示的あるいは暗示的な学びを用意することが、来訪者に対しては単に視覚的な満足に止めない、また活動実践者側も土地の文脈から離れた花のテーマパーク化^{注3)}に走らないために必要と考えられる。

一方、来訪者の増加に伴い公開地に入るにあたって協力を徴収していることも、両実践地の特徴の一つである。無理なく安全に林内を周遊する散策路の整備・保守や樹林管理に加え、公開期間中の乗用車の交通整理、公開地周辺の野草類育成や花木園整備に充てられているとされた。これは農村における「小さな経済」¹⁶⁾とみることもできるが、本事例では若干意味合いが異なっていた。すなわち、小遣い稼ぎとしての意味合いはなく、管理に必要な燃料・資材費、日当等を補うものであり、それでもなお持ち出しが少なからずあるとする(ヒアリングによる)。協力を徴収しても未だ持ち出しがあることは活動の持続性の点で脆弱な面が想定されるが、いずれも地域の良質な里山や野草類等の景観資源を来訪者に評価されることで張り合いを得て、里山林の管理作業を含む地域活性化活動を展開していた。ヒアリングにおける「普段の野良仕事だけではつまらない」という回答に代表されるよう、自身らの活動によって外部から多くの人々が来訪するといった遣り甲斐が生じることの方が、金銭的な側面以上に重要であったことを指摘しておく。

大澤・間野¹⁷⁾は、湿生野草類ノウルシの開花景観が外部来訪者から評価されることで野焼き活動等のインセンティブを得ている事例を報告しており、本事例と類似した構図であった。もちろん協力を徴収するようになっ

ても多数の来訪者数が得られたことで、その開花景観はそれぞれの地区固有の地域資源であるという認識をより自覚するようになり、「来訪者に満足して帰ってもらう」という遣り甲斐の度合いも増していた。これは、近傍地での副次的な開花景観の育成・整備を展開していたことによっても傍証される。なお、寺畑²⁾によると、全国のカタクリ公開地でも同様に協力を得て維持管理費に充てている地区も多いとしており、またカタクリ以外の開花景観の公開地でも協力金・入園料・入山料・駐車料等を徴収している場所も散見される¹⁷⁾。このように、数百円程度の協力金であれば在来野草類の開花景観によるフラワーツーリズムは十分に成立し、またニーズもあると考えられる。

両実践地とも一定の知名度を得ていたため、2015 年からは町の観光協会がタイアップした宣伝を行うようになり、合わせて観て回る来訪者も多いとする(ヒアリングによる)。これには、両公開地が比較的近くに位置すること (Fig. 1), 対象植物種の開花時期が概ね重なっていること (Table 1), 特にそれが他のフラワーツーリズムの開花景観地より早い時期の春を最初に感じられる早春開花型の野草類であること、が理由と考えられる。開花景観という類似活動故の連鎖と、続くタイアップといった波及効果が生じていた訳である。

以上、在来野草類の開花景観が地域活性化の駆動装置として機能し得ることを明らかにした。それは、特色ある開花景観との邂逅を起点する、樹林管理と公開の試行と実践、特に地域資源を来訪者への提供であることの協力を介した自覚、愉しみややり甲斐を感じつつ里山林の管理・活用の継続といったものであった。その背後には地域のキーパーソンを中心とする地域活性化に協力を惜しまない人々の存在があり、彼らは必ずしも当初は野草や自然の愛好家ではなかったことが特筆された。開花景観の保全・育成の先に、地域活性化に対し自身らで出来ることを愉しみながら行うといった活動の姿勢があったことで、多くの地域の協力者の参画を可能にしていたと考えられる。

大澤¹⁸⁾は、地域に賦存する環境資源を用いて、遊びから生業の複合の中で自然との関りを多様に企画・実践し、無理なく楽しみながら地域づくりを展開することが、人口減少時代における農村のマネジメントの一つの在り方と指摘する。本事例を鑑みると、地域に自生する野草類、特に里山林の管理がその生育に影響する野草類は「自然との関り」を示す一つの有効な素材なのだろう。その実践過程として、本研究において遑近期―試行期―自覚的実践期の過程の存在が得られたが、継続あるいは次の段階へ移行する過程の把握・検証が今後の課題として残さ

れている。すなわち、活動継続の重要なインセンティブに「手作りの祝祭性」が関与すると思われる^{注4)}、その内実の把握が求められる。

謝辞

本研究を行うに当たり、ご協力を頂いた富山船戸いわうちわ保存会の益子操氏、鈴木雅仁氏、NPO 法人 山野草保存会の石澤隆美氏、塚原深氏、薄井三郎氏にこの場をかりて、厚く御礼申し上げます。また、日本大学生物資源科学部緑地環境科学研究所の田代珠希氏、比嘉友里恵氏、鈴木涼氏にも研究協力を頂いた。記して謝意を表します。本研究は科学研究費補助金 基盤研究 C# 20K06114「在来野草類を用いた農村ランドスケープの空間価値向上手法に関する研究」(代表者：大澤啓志)の成果の一部である。

注釈

- 注 1) 低木層の植被率は群落全体(カタクリ群落：約 3ha、イワウチワ群落：約 1ha)に対して求めた。
- 注 2) 群落開花景観に園芸花卉類を用いる場合、植え替え、施肥、消毒等に集約的な管理を必要とするため面積が限られることが指摘⁹⁾される。
- 注 3) 両実践地とも、近傍地に副次的な非自生種・園芸花卉類を用いた開花景観を順次整備しており(表 1)、コアとなる自生種の開花景観の魅力を強化している側面がある一方で、度が過ぎるとその固有性を薄めることで魅力の低下に結びつくので注意が要る。
- 注 4) 公開期間中には仮設の小屋で入山券発行や地元物産等の販売が行われ、物産の搬入や当番のスタッフへの差し入れ時のお茶とおしゃべりが楽しいひと時となっているのが観察されている。同様に、全国のカタクリ公開地でも開花期間中のお祭りによる地元のふれあいの深まり、生活の目的が出来るといった経済外的な効果の存在が指摘されている²⁾。農村域での非日常としての祝祭性、特にそれが気心の知れたメンバーによって手作りで行われることの意義をここでは指摘しておく。

引用文献

- 1) 大澤啓志・間野明奈(2019)：埼玉県「浮野の里」における湿地の変遷と地域景観資源としての認識過程に関する研究、農村計画学会誌、38、221-229。

- 2) 寺畑理絵・鈴木貢次郎・両角政彦・濱野周泰(2011)：全国のカタクリ公開地における観光資源としての利用実態、造園技術報告集、6、48-51。
- 3) チームさかわ(2014)：『みんなでつくる総合計画 高知県佐川町流ソーシャルデザイン』。学芸出版社、東京。
- 4) 重松敏則・高橋理喜男・鈴木尚(1985)：二次林林床における光条件の改良が野生ツツジ類の着花に及ぼす効果、造園雑誌、48(5)、151-156。
- 5) 養父志乃夫・重松敏則・高橋理喜男(1986)：キツネノカミソリ群落の成立と育成管理に必要な生態的諸条件、造園雑誌、49(5)、137-142。
- 6) 近藤哲也・榎本博之(1998)：福井市におけるウマノアシガタ個体群の畦畔への導入とその後の植生管理、ランドスケープ研究、61(5)、551-556。
- 7) 森有希・大窪久美子(2005)：本州中部亜高山帯の半自然草原におけるヤナギラン群落の群落構造と立地環境、ランドスケープ研究、68(5)、709-712。
- 8) 大澤啓志・比嘉友里恵・田代珠希(2020)：雑木林の林床管理再開によるシュンランの生育環境改善の効果、日本緑化工学会誌、46(1)、142-145。
- 9) 重松敏則(1987)：林床景観の植生管理(高橋理喜男・亀山章編、『緑の景観と植生管理』)。ソフトサイエンス社、東京、161-180。
- 10) 養父志乃夫(1996)：野生草花・花木の育成(亀山章編、『雑木林の植生管理』)。ソフトサイエンス社、東京、165-173。
- 11) 川井英(2001)：日本一のカタクリの里を目指したい！、趣味の山野草、249、14-15。
- 12) 米倉伸之・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編(2000)：『日本の地形 4』。東京大学出版会、東京。
- 13) 藤本和弘(1978)：樹林のレクリエーション利用とそのイメージに関する基礎的研究、造園雑誌、42(2)、23-29。
- 14) 梶返恭彦(1987)：視覚的な好ましきからみた森林構造、環境情報科学、16(1)、75-80。
- 15) 下村彰男(1997)：フォレストスケープ・デザインの方法(堀繁・斉藤馨・下村彰男・香川隆英、『フォレストスケープ』)。全国林業改良普及協会、東京、73-98。
- 16) 小田切徳美(2014)：『農村は消滅しない』。岩波書店、東京。
- 17) 中村義毅(2015)：『絶景 日本の花巡り』。析の葉書房、栃木。
- 18) 大澤啓志(2015)：伝統的地域資源の管理・利用に見る環境思想と農村計画、農村計画学会誌、34(3)、337-340。
- (2021.4.7 受理, 2021.8.30 採用)